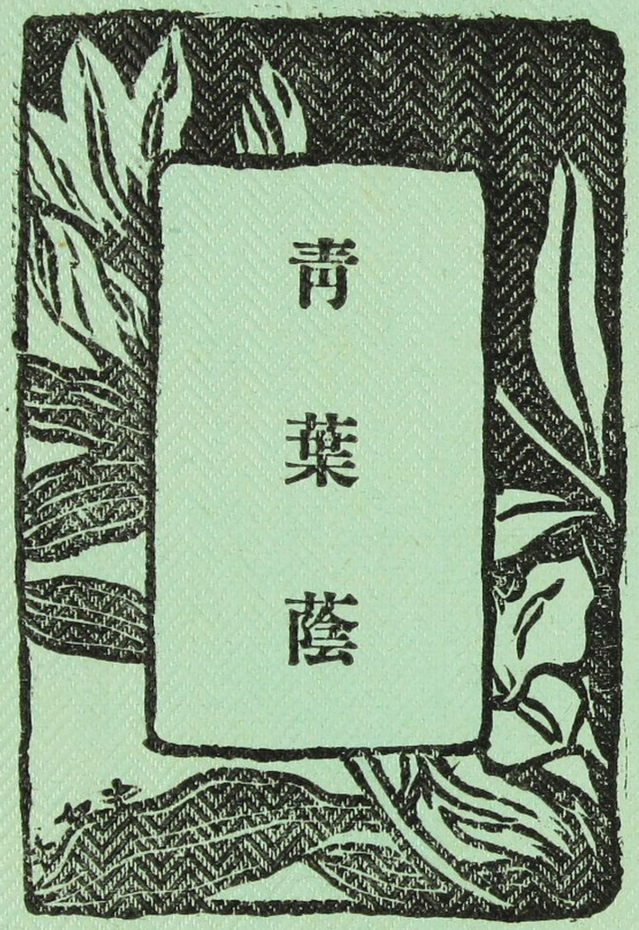
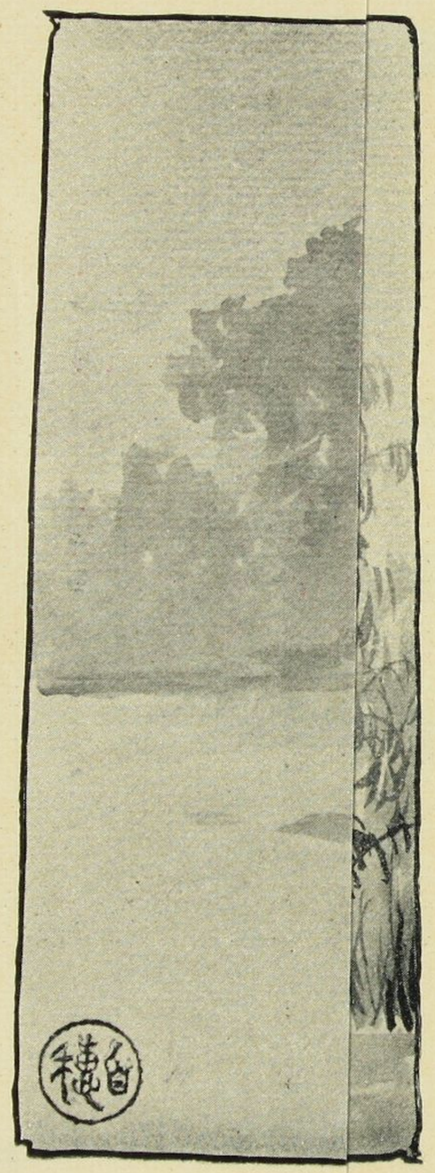
青年のみち


青葉蔭



青葉蔭目次

夏の小川……平福百穂……口繪
夏の野邊……蒲原有明……巻頭
夏の田園……高須梅溪……一
夏の都府……田口掬汀……一六
夏の水草……金子薫園……四三
夏の深林……正岡藝陽……四七
夏の海畔……四村醉夢……五四
夏の放言……崑崙山客……六六
夏の温泉……登阪北嶺……七七
夏の追懷……奥村梅皐……九三

青葉蔭目次

夏の小川……平福百穗……口繪
夏の野邊……蒲原有明……巻頭
夏の田園……高須梅溪……一
夏の都府……田口掬汀……一六
夏の水草……金子薰園……四三
夏の深林……正岡藝陽……四七
夏の海畔……四村醉夢……五四
夏の放言……嵐嶺山客……六六
夏の温泉……登阪北嶺……七七
夏の追懷……奥村梅皐……九三

夏の野邊

蒲原有明

野ぢは戀ぢにあらねども
野草は熱きあぢがれに
みどりの夢のそのいきの
はげしく深き夏の野べ

かなたに消ゆる世のかげの
みだれはあゝにおさまりて
青野花草口にとくる
銀の音に似たりけり

高き光の洪水に
君よあの時たゞよへば
こゑもつたへぬ深海の
小舟の身こそかしけれ

かしぢ港やいと清き
おもひぞ泊つる青葉かげ
かしぢつきせぬ眞珠を
さぐるもよしや野のいづみ

戀路は野ぢにあらねども
あやみの草の夏しげき
かげにもあどや靜けさの
よろぢびふかき夢のなからむ

青野花草に
銀の音に似たりけり

高き光の洪水に
君よあの時たゞよへば
こゝろもつたへぬ深海の
小舟の身こそをかしけれ

かしあ港やいと清き
おもひぞ泊つる青葉かげ
かしあつきせぬ眞珠を
さぐるもよしや野のいづみ

戀路は野ぢにあらねども
あやみの草の夏しげき
かげにもあどや靜けさの
よろあびふかき夢のなからむ

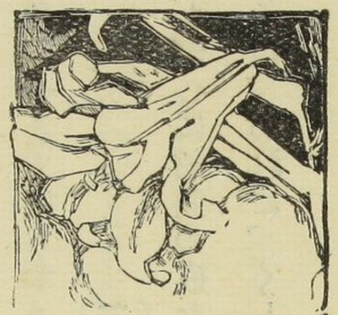
青葉蔭

夏の田園

高須梅溪

（一）

市井のかしましきをいとひて、早稲田の草堂に歐西の詩を吟ずるやうにありてより、紅白の彩花は、いつしか新緑の影とかはり、水も、木も、草も、空も、心地よき活動の姿とありて、初夏の樂聲は、や



青葉蔭

夏の田園

高須梅溪

（一）

市井のかしましきをいとひて、早稲田の草堂に歐西の詩を吟ずるやうにありてより、紅白の彩花は、いつしか新緑の影とかはり、水も、木も、草も、空も、心地よき活動の姿とありて、初夏の樂聲は、や

かしま港やいと清き
おもひぞ泊つる青葉かげ
かしまつきせぬ眞珠を
さぐるもよしや野のいづみ

戀路は野ぢにあらねども
あやみの草の夏しげき
かげにもおどや靜けさの
よろこびふかき夢のなからむ

がてわが草堂を音づれぬ。

（二）

初夏の田園。こは、わが心に深き銘刻の跡を殘したりき。水きよき小川の流れにたゝずみ、草あをき野原のあたりにさまよひ、風すゞしく、木々のかほりを送る石上に踞して、默想の幻夢を追ひたるあど、いづれか、わが心になぐさめの花を與へざらむ、今そが一節を手記せまくほりするなり。

（三）

わが心に銘刻の痕を殘しつる、その一つは、麗はしき堀井の水なり。そは、われに、くしき空想の畫樓を築かしめ、路人に晶潔の色を稱

へしめたる、堀井にして、わが桑圃のまへに絶間なく、水を噴き出てつゝあるなり。

その水のきよきさまは、水晶の清麗透明なるにも似て、二尺余の底までも、すきとほりて見ゆるを特色とす。新曉の星かげ、夕の落日、東天の旭紅、夕の皎月、かはる〳〵水にうつるを見ては、鮮麗の傳彩をたゝへ、幽微の聲律をよろさびて止まざるは、たゝわれひとりの領するとおろかり。此聲と色とは、雲雀の聲のどかなるときにも、桐の葉の雨さびしきときにも、かはるおとなく、われを慰む、おとに初夏の頃より中秋の頃に至るまで、一しほ爽涼の趣あるを見るなり。

夏の初めつかた、朝の夢やぶれて、堀井のあたりにたてり。水は一分時、一秒時の間にも、たえず湧き出でゝ、まろく、おほきやかなる桶の中に溢れ、溢れたる水は、苦むしたる方形の小桶におち、又更らにあふれ出てゝは、むせびつゝ、はしりつゝ、溝渠のうちにかくる。まろく、おほきやかなる桶の直徑は、二尺ばかりにして、そが中側には、ながき、鬚のやうなる、藻の草かろく水にゆらぎ、青き雲白き雲、みな一樣にそが水平の上にうつりて、桶の底にしづみつる細砂は、つぶらかなる玉のごとくに、見えすきたり、このおほきやかなる桶より溢れ出づる水は、さゝやけき瀧のすがたとなりて折ふしの風に吹かるゝおとに、分れて二となり、又、三となり、細

霧に似たる水沫、たゝずむ吾の衣袂をうるほし、爽涼の氣味、身にしむをおぼゆ。

今しも東の空に微紅の匂ひほのめくや、雲の色は紫となり、紺青となり、水も亦自らその色にかはりゆきて、緑、紅、紫、白、互に乱れ、互にゆらめき、五彩の水紋を織る。うつくしきかな！こはわれ知らず洩れ出でし讃美の聲なりき。わが堀井の水は、かくの如くにして、道ゆく人の足を止めぬ、少女もその清き色をたゝへ、若男もそのあまき味をよろこび、おとに勞役のなやみにしばしの休息をとらんとするものは、奔りてこの水のほとりに來るなり。

初夏の眞晝、われ水の聲と色とを見て、むしあつき空氣の中にある

あとを忘る。

（四）

わが心に銘刻の痕をのこしつる、ろの一つは、郊外の散歩ありき。

落花啼鳥、あはたゞしうすぎて、早稲田の森に緑の色うるはしき頃、

醉茗子、まづ我草堂のほとりに居を占め、天聲子ついで、近きわた

りの緑蔭にノーベルの筆を染むるやうになりぬ。

落花の恨みは、われになくして、桑圃に詩を誦するもの、おほくあ

りしをよろこびぬ。

森林の默想は、夏の頃ほひをよしとす。されど、ゆふ月ほのじろく

微風若葉を吹くころ、衣袗かろく風にひるがへして平和の樂みを同

うする郊外の逍遙こそ、一しほ趣あるものなれ。

一夕、默想のさびしき座を占むるのとき、天聲子、たゞひとり、わ

が草堂の扉をおとなひぬ。子は浩々歌客氏の令弟にして、その面影

いたく似かよへるところあり、そか嗜好の同じきところより、はや

くも親しき間とはなりにき。

心ゆくゆふべや。郊外の逍遙、風を追ひ、露にぬれて、面影橋のほ

とりにたゝずみなば、……われはかく云ひて、くれゆく空の氣色

をながめやりぬ。天聲子も感興の糸に觸れたればとて、共に草堂を

出で、醉茗子を誘ひしは、星一つ空にきらめくころほひなりき。

『無弦弓』のやさしき調べに蝴蝶のはかなき姿を憐みたる醉茗子は、

流石に野の夜道の恐ろしきとよと云ひ出づれば、田園の間に人とゐりし天聲子は、そは余りに心よわきことゐらずや、と罵り、われも亦天聲子に味方して、詩人は優しきものよと云ひしは、われながらいと興あることに思ひぬ。

今われ等が夏草の茂みをたどりゆくは、武藏野の平野ゐり、夏の畫工は、田畝にも、森林にも、丘岡にも、ひとしく綠の色彩をほどゐして、ゆふ風ゆるく渡る毎に、丘岡の綠まづゆるぎ、森林の綠、ついでゆらめき、はては、田畝の新麥も綠の波を揺きて、終にわが戴ける夏帽子を中空に飛ばさむとはしぬ。

相顧みては且つ語り、且つほゝゑみつゝ、小橋を渡り、細徑をゆきやがてひろやかゐる野徑に出づれは、水車のめぐる音、かしましく聞ゆ、ゐは神田上水のあるとゐろなり。

水は濁りたれど、淙々の聲、瀟々の調、さゐから、詩の神の福音を傳ふるが如く、両岸より枝を垂れて、ほと〳〵水にふれなむとする綠樹は、その影を倒映し、崖下につゐがれたる小舟は、水のまに〳〵漂ひて漣波の上に横はり居たりき。

上水に沿ひて、今少しく道を辿れば、水は一段高きほとりより落ち來りて、鏘々然として瀉下し、時ならぬ落花の雪、玉屑と戯れ、泡沫と爭ひ、やがては、青く湛えたる平水の上に奔りゆくところ、都はづれにめづらしき風趣なり。

風一陣、颯として、われ等の袖をひるかへし、両岸の緑樹、葉は葉とさゝやき、枝は枝とすれあひて、水上の樹影、又ひとしく漣と共にゆらぐ。

星はやがて其數を増しぬ。

左の方には、田畝あり、森林あり、而して其間を縫ふものは、町はづれの燈影あり。燈影のうつくしきは、かゝる塲合に初めて認むることを得べし、そは田畝の緑と、森林の黒きと、桔梗色の空と、此三色の間に一点、二点、燈影、星のおとくきらめきつゝあるは、少からぬ趣を添へたればあり。

醉茗、天聲の二子も亦燈影のうつくしきをたゝへてやまず。

駒塲橋は、風葉子の『十七八』の悲劇を畫きつるところあり。われ等は此橋上を過ぎて、水に沿ひ、草を踏み、椿山莊の好風致をたゝへぬ、此あたりに詩人會を開きてはいかにと云へるは、醉茗子なり、そはいとよきおとぞと云へるは、天聲子なり、さてそが要求のふみは、梅溪子に一任することそよけれと、天聲、醉茗の二子、ほゝえみて、われを椰揄す、われ笑うて答へず、ひとり空の星を數へぬ。

やがてわれ等は、面影橋畔にたゝずめり。

面影橋は、そのかみ業平の卿、東の里に下り給ひしとき、うるはしき御姿を、流るゝ水にうつし給ひしところぞと云ふめり。面影のみやびたるを橋名とおしたるは、やがて此風流の韻事にちなみあれば

なり。

醉茗子、既に其名のみやびたるを愛し、はた、水の流れ、岸のおもむき、自ら都雅あるに心をうおかせるは、うべなり。水は、かすかにむせびて橋下を流れ、両岸の草樹、おもむろに風にそよぎ、螢火一点、橋下の闇を縫ひて、叢の間に入る。われ等、欄によりて、かすかある水の聲を聞き、さゝやけき樹の葉のゝよぎに思ひをひそめて、涼味、流石にさむきをおぼえたりき。

その後、われ暇ある毎に、水聲、樹影の間にさまやふ。

（五）

わが心に、うるはしき銘刻の痕を殘しつるものは、五月雨の詩想あ

りき。

『五月雨や色紙へぎたる壁の跡』こは蕉翁か嵯峨の草堂に於てうたへるとあるあり。五月雨について、古來俳人の名句にとぼしからざれども、われは其幽暗の色を忌み、沈鬱の形を喜ばざりしあり。あは大ある誤りありき。田園の生活は、われをして、そを悟らしむべく、五月雨の詩趣を暗示したりき。

武藏野の平野を渡りゆく五月雨のいかに趣あるかを見ずや。ゆうぐれ、街道のほとりに立ちて、野を望めば、細雨、野を渡りては、野をこめ、森をすぎては、森をこめ、川をすぎては、川をあめ、家をよぎりては、家をつらむ、此塗抹によりて、野は幻の如く、森は夢の

如く、淡々焉として雨中にかくれ、模糊として又あらはれ來る、耳を傾くれば、潚々たる雨の音、閣々たる蛙の聲、たがひに乱れて、雨聲、遠きがごとく、近きがごとく、密なるが如く、單なるが如く洒々たり、潚々たり、自然の樂堂、造化の彈手、恣きに神の御琴を調ぶるを聞くのおもひあり。

街道を出てゞ村の堤上を歩すれば、柔かなる夏草、うるはしき綠樹白き卯の花、淡紫の無名花、ひとしく瑠璃の露をやどし、燦爛の珠を貫きて、風ふき、雨そゝぐ毎に、ばらりとおぼれて、露、露と乱れ、珠、珠とまろび、虫聲、一味爽凉の氣を加ふ。

堤上をすぎて土橋の上にたゝずむ。橋下の水は、五月雨によりて、

其量を増し、そが勢を加へ、ゆるやかなりし流れは、急激となり、低かりし水平は、堤上の草をうるほさまくほりするの勢ひあり、水は吼へ、叫び、躍り、奔りて、橋下を過ぎ、森林影くらきところに入る、上流の方は、雨にとざされて、うすく、おぼろに、淡としてからむとす。

雨滴、水をうつのとき、小圈より中圈、中圈より大圈の輪廓をつくるあとあり。

かくの如くにして、われは五月雨のよろおぶべきを知り、擔滴の下、常に蕉翁のさびたる句を想ふ。（をはり）

夏の都府

田口掬汀

（朝）

夏は來た。來ずもがあと望んでゐたが、之は自然に來るのだから仕方がない。

頭は燒かれるやう、沙塵は大濤の狂ふやうに街々を飛狂ふ。拾何萬の學生諸君は、早く、懷かしい故郷に歸つて、木蔭の綠深い處に躰を横へて、都で過した手柄話や、一段々近づいて來る成功の面影やらを語合つて、心のまゝに山野の清涼を貪らうと云ふので、當初郷を

出る時は恰も戀人の許へでも行くかのやう、夢中の感で慕つて來た東京に、此度はまた酷い愛想の盡しやう。這麽所には一刻も居られあいと、宛然後足で砂を浴せるやうに、匆々と逃げて仕舞ふのだ。

また都人の中でも多少餘裕のある人は、大磯、江の島、逗子、謙倉北は日光、松島かけて、呼子鳥鳴く外ケ濱から海を渉り、果は北海道の山野までも、避暑旅行と云ふ觸込で出發する。されば盛夏の眞只中に、名物の熱塵をしたゝかに被つて、未練らしく都に停つてゐる者は、懷中の淋しい僕等の如き一類か、若しくは足腰の不健全な御歴々、其ほかには能く〳〵家業に忠實なお方々のみであらう。

僕は元來東北の出生、寒嵐吹雪の中で鍛へた躰だから、東京の冬な

どは、裸一貫で暮しても嘘一ッするとでおいか、さて夏と來たら青葉に塩、忽ち萎然して仕舞ふのである。歸り度いは山々だが、色々の情實が纏綿して手足心のまゝならず、詮方なさに目を瞑つて、額に玉の汗を沸らせおから、些も熱くないと、りきんだもの、泣く〳〵踏止つたものである。

晝は眠つて夜働くと云ふ、まるで世を忍ぶ落人が、草木の果にも心を措いてゐるやうなのだ。夏の都府は斯の通り、苦しい辛いには相違ないが、果して諸君が愛想盡しをするやうお、まかく見所のおいものであろうか。僕は斷乎として左に非ずと云ふ。夏の都府は比較的平和である。狡黠お惡猾い、社會的戰爭をする所の、敏腕のお方

々が、滔々相率ゐて似而非文明の空氣を、田舍へ運んで行つて呉れるたけ、其丈け都は平凡におるのだ。剩へ意志の箍の弛む、生氣の懐げる夏の只中では、どんな才士でも策略屋でも、他人の揚足を浚つたり、生馬の眼を抜いたりする、際鋭い魔術が行り惡い道理ではあるまいか。

夏が來ると僕の身に破格の事例が二ッ生じて來る。一つは柄にもない早起をするとで、一ッは夜歩きをするとである。しかく破格の運動をする丈け、從つて未見の現象を見るのである。併し乍ら僕が破格の行動を、例格として居らゝ人々には、敢へて珍とするに足らぬだろうが、其は僕の關する所にあらず、僕は僕一已の處存に依て

さう思つてゐるのである。朝寢妨の家内辨慶が、平和なる都府の巷を彷徨いて、手帳の端に書き記したのは甚麼ものやら、それを見るのも一段の興味があるでなかろうか。

まるで狂氣の沙汰であるが、或夜、三時の鐘を聞くと、蚊帖を搔おぐり棄てゝ戸外に出た。朝風靜に吹廻る幾條かの衢を拔けて、未だ眞闇お上野の山に登つた。

濕りを有つた長椅子に靠つて、靜に四邊を視ると森の中は未だ闇で、品川の沖合から東雲の空やうゝに白み渡つて、それが次第に輪廓を潤げて段々乳色になつて來る。まだ明放れぬ都の空は、鳩羽鼠の絹幕を張渡したかのやう。其の幕の下には幾十萬の大厦矮屋が、百

五十餘萬の夢を藏んで、閒然として眠つてゐる。殘光仄かなる町々の軒燈は、まれも眠氣に光つてゐて、譬へば汪漾として動かざる夕闇の湖に、滿天の星影を浸してゐるやうに思はれる。車轍の響きも汽笛の音も聞えない。朝嵐徐ろに四邊の梢を渡る毎に、ばら〳〵と露がおぼれて、溥然と濕氣を含んだ地の面から、綠の色ある風が湧立つて來るやうだ。關八州の平野に漲る滿天の涼氣は、一導清流の如く空に漂つて、幾百萬の民衆が殘夢靜かる曉方の枕に注いでゐる、と見ると、つい今し方まで、擦硝子の障子越しに、白熱電氣燈の光を見るやうであつた空の果に、花やかな薄紅の色が泛んで、朧氣ながら品川の砲台らしいものが、幽に黑ずんで見えるやうだ。而して

海面も都も未だ全く眠を覺さないでゐる。直ぐ眼の下には、何方から、どうして出て來たのか、二三本の高い煙筒がすつくりと聳えてゐた。やがて其煙筒から黑煙が吹出されて、汽笛の響が都の眠を愕かして、空が段々赤くなつて來ると、都の民は樂しい曉の夢から覺めて、それから熱い〳〵と喚き乍ら、灰のやうな熱埃を被つて、米の料取りに忙はしくなるのである、と思ふと實に情ない、夏の都會の奧床しいのは、全く黎明の比ひだ、あゝどうかして、此平和なる朝景色を何時までも保ちたいものである。

長椅子に靠つて恍然して、次第に赤らんで來る空を、心細い感をして見てゐると、突然どしりと地響がしたので、はつと愕くと、直ぐ

耳の許で、

『お早ふ御座いやす』と大いに寂れた聲がした。

『お早ふ』と鸚鵡返しに云つて眤と視ると、六十歳前後の肥つた爺で滿更卑しからぬ身の裝ひ、……身分はどうも鑑定つかぬ……腰から煙草入を拔いて、さて悠然と煙を嘯らしなから、

『朝景色はまた格別で御座りやす』

『左樣、夏は全く朝に限るですな。』

『全くで』と丁と椅子の端に煙管を叩いて、くる〳〵と指の先で曲藝をさせて、『丁度今時分が見頃なんで　既う少時經つと、脚氣病が朝露踏みに跳足で來る、辨天社なんかにや、御幣擔が朝參りをしやす、

色々お奴がぞろ〳〵參りやすんで、煩さくなつて堪りませんや。』
僕は自分の言ふことをまるで言つて仕舞はれて、
『朝ばかりが樂しみで……』と何かなしに調子を合した。
『いかにも……太陽さまがお出御なさると、此方達が泣きます代りに、意地の惡い……喜ぶ者がありますぜ、氷屋は勿論のこと、大川かけて沖合まで釣客を乘せる船頭衆。晝寢場所の待合貸席、下宿屋なんざ、書生さんの帳尻を洗ふのが、此月ばかりだおんて、悅んで居りますさうで』
『成程、家業が違つちや、まよ〳〵色々お考であるですな。』
『傘屋は雨天を悅びます、傘屋の紋日は屋根職が泣く日で、政府の金

庫の肥える時は、我々人民が疲せます譯で』
圖に乘つて饒舌り出したが、不圖空を視ると驚いた顏、
『いや先おお別れとしやせう、既う天道樣がお出御あさる』
盥の如き一大朝暾が、圓い頭に千万條の金箭を戴いて、悠然として舞上る、下には花賣の呼聲が聞える、天地は黃金色に變つて來る。車轍の響きが聞えて來る。戀しい森を立放れて下街に下りると、滿街の空氣ははや生ぬるく熱してゐた。

（晝）

午下二點の時鐘が鳴つて、例時の晝寐の時刻が來た、が、あたら時

間をむざ〳〵費すのも惜しい、と今更殊勝な志が起つたもので、――芝居の臺詞でよく聞く所だ、一日に一字學べば一年に三百六十字と聞いて居る――何ぞ讀んで見やうと思つて、傍の書架から手當り次第に乱抽して見ると、西廂記と云ふ支那の小説、其六つかしいとまた一通ならず、少し讀むと忽ち飽きが來て仕舞ふ。已むを得ない、此時刻はかならず懶けねばならぬやうに出來てゐるのだから……。

手狹ながら前には庭園あり、椽に吊した青簾を透して眺めると、草木の葉が萎然と垂れ下つて、そよとの風もないのに、烈日の光線が容赦もなく照附けてゐる、其に鈍い瞳を射られると、眼がちら〳〵して頭が痛くなつて來る。家の建込んだ路次の中なので、風の來るべき處もない、室内の鬱陶しいと一通ならず、舌皷うつて前面を見ると、向家の屋根の鬼瓦が眼を睜つて睨んでゐるので、恐縮して寢返りした。天地まさに日盛の眞只中、此時都の巷を通るものは、乘客のない鐵道馬車、郵便配達位のもの、總ての生ある者は聲を殺して、滿都の空は寂然として物音ない。

また一ッ寢返りした。其途端に傍の路次に勇しい聲。

『アイスクリーム、えゝ、アイスクリーム』

此炎天を物ともせず、勢込んで呼んで行くのだが、誰も呼ぶ者がないのであろう。忽ちそれも聞えなくなる。

瞼に千鈞の重みがあつて、幾度睜かうとしても其甲斐ない。恐らく皮膚の彈力が弛んだのであろう。睫か靜に交つた、と思ふと、誰やら、ふわりとした物をかけて、

『氷水でも取つて來ませうか、召上らないの』

誰だろう。聞覺えのある聲だが明瞭分らない。其親切に對して一言位は禮を言はずに居られない譯だが、舌が弛んで物が言へない。いや寧ろ物を言はれると、癪に障つて堪らぬのだ。

それも段々惘と失神がして、好い心地になつて、とろ〳〵と沈んで行く心になると、忽ち何處やらで消魂しい聲が聞える。

『お母さん……はや……く、早くッたらよ……』

雨戸を繰る音がした……僕の頭の上でも何か叫聲が起る。

愕然として刎起きた。蹌踉する足を踏固めて椽に出て見ると、聲の主は斜向ふの屋根、物干臺の上に色白の小娘がゐて、忙はし氣に干物を外してゐるので、別に異變のある樣子もない。馬鹿〳〵しいと舌鼓うつて、眉根を寄せて空を瞻仰ぐと、騷動の原因は之れありけり。西の空から銅色の綿雲が舞ひ颺つてゐて、今まで目眩しく晃々してゐた空が、何處となくどんよりしてゐる。

椽側に踞して無心に空を凝視てゐると、其綿雲の底から殷々と遠雷が轟き出す。雲は益々黑くなつて、鵬翼千里、滿天の嵐を孕んで擴がつて行く中から、冷風颯々と落ちて來て、庭の樹立をさら〳〵と

揉出した。砂塵が庭の右端から引剝されるように左へ捲去られた。

愉快、愉快、愉快ある夕立は、まさに滿都の熱埃を、一洗に洗ひ去らうとするのである。

雷鳴ます〳〵烈しくなつて、時々幅の廣い青い電火がきら〳〵と閃めき渡る。物凄じい景色であるが、いくら降つても照られるよりは優だ。尤も雪が降ては夏が宜いと云ひ、夏が來れば寒くても冬の方が宜いと云ふのが、即ち變化を欲する自然の性情であるが、夕立の壯觀と云へばまた別種の趣味があるもの、況んや連日の酷熱に渾身の生氣を殺がれた僕には、此ひと降雨は万金の賜物、早く〳〵と待つて居るが、なか〳〵落ちて來さうもない。

近所の家々て雨戸を閉ちる音が、一しきり響渡つた

やがて簾外の光景が黑ずんで來て、慌てたやうに風鈴が鳴出す、土臭い匂ひがはつと室内に充ちると、豆粒大の眞白なのが、横さまに飛落ちた。と見る間もあらせず、瓦を叩いて飛來る驟雨の速さ、長大無限の白箭横なぐりに飛んで、韼々と云ふ物の音、只今し方まで灰のやうであつた褐色の地の面が、瞬く間に墨色に變つて、軒の筧に溢るゝ水が、無數の白玉を作つて、容赦もなく椽側に飛んで來る。地上より跳返す水沫は、譬へば深山の谿谷に漲る濃霧のやう。濛々として室内に襲うて來る、雷鳴、電火、驟雨、疾風、實に壯觀無比！眼が明瞭して躰が引締つて、爽涼の氣が六合に漲り渡つたのだ。

夕立の光景ほど人の心意を爽やかならしむるものはない。這麽狹苦しい室内で見てさへ此の通り、若し上野の森の樹立深いあたりで、此大雨を浴びて、此烈しい電雷を聞睹したなら、どんな壯觀であるだろう。いやそれよりも、人跡絶えたる深山で、空を摩する大木の根に踞して、大雨萬壑を壓して四邊暗澹たる眞只中で、かゝる雷鳴を耳にし、かゝる電火を眼下に瞰たから、どんなに快絶……物凄い感が起るであろう。

雨はます〳〵烈しくなつて、板屋を打つ音が、小石を攫んで投附けるやう。鳴りはためく雷の怒り、譬へば大鍋の水が激しく煮沸するやうな音になつて、皷膜を貫く響の凄じさ。僕は流石に心怯えがし

て、二三歩後に逡巡く途端、後からばた〳〵と駈けて來たのが、俄然と傍に座つて、佐と僕の袂に縋つた。

『伯父ちやん、怖いよ』と泣出しさう。

名は福ちやん、年は六歳、下豊の色白な兒で、垂髮にリボンと云ふ扮裝、白地の單衣に緋チリメン幽染の帶。誠に邪氣ない少女で、僕は福の神ちやんと呼んでるのだ。

『怖いとはないよ。母ちやんゐないの？』

『母ちやん他へ行てよ。妾怖いわ』とます〳〵寄縋る。

『伯父ちやんに密接てゐれあ怖いとはないんだ。福ちやん雷さんを怖くッて』

『あゝ、お臍を抜かれるんだもの』と眞面目なもの。

『悪戯をすると抜かれるんだ。伯父ちやんが寢てゐる所を、髯を引張つたり何かしちや、必と抜かれる』

『妾、今度から引張らないわ』

『ぢや伯父ちやんが雨を霽らして上げやう。ね、雷さんも鳴らないやうに、お詫をして上げやうね』

空を向いて譯の分らぬ言を唱へて、暫く合掌した。福ちやんは眼を大きくして見てゐるのだ。

『伯父ちやん、何時霽れるの？』

『もう直きた、そら段々に晴れて來る』

夕立空の極りのよさ、流石の暴天も二十分ばかりて全然霽れた。屋根も庭も草も木も、しばしの間に元氣を盛返して、一躰に生氣溢るゝのに、眞赤な西日が鮮やかに照り出した。

それから福ちやんは、伯父ちやんは雷樣と談話をするわ。豪いのねえと云つて、何處へ行つても吹聽して歩くのである。

（夕）

天の嚴命默しがたくて、日中は閉門蟄居の謹愼をしてゐた下界の有情物が、夕日西の空に隱れて、夕靄ほのかに立罩めて來ると、一時に調子づいて騷ぎ出す。家々の門口には撒水の香高く、門の納涼、吟

歌の聲、車夫の掛聲が勇しくある、露店の燈火が星の如く點される。白地浴衣、麥藁帽子、群を組み、隊を伍し、大路小路に漲る人波はさながら雲の湧立つやうに思はれる。

月の良い夜である。僕は一友を拉してぶらりと家を出た。

何處へ行かうと云ふ方位もないが、脚の行くまゝ、氣の向ふ次第、悠長至極にぶらり〳〵とやつて行く。

『あの良夜を奈何だ。……兎に角閑靜な所へ行かうぢやないか』と僕は動議を提出した。

『大いに行く、が、まあ賑かな町を通つて行かうぢやないか』

『まだ色氣が失せないんだね』

『御説だが、色氣が失くなれあ、人類の種が盡きますよ』

と友は素晴らしい人種保護論者である。國家人類の爲と云ふので、僕は己むなく友の後に跟いて行くのである。

行先は愛宕の山、新橋までは鐵道馬車の便をかりて、それから愛宕下をぶら〳〵した。

緣日でもあるだろう。廣い街の両側に、幾千とあく點された露店の洋燈から、濛々と油煙が立騰つて、人いきれのすると夥しい。

『博△堂製の安眠劑。大罐一個で代價は拾錢、白銅二つで一週間は安眠出來る……』

鍔廣の麥藁帽子に、大きな青眼鏡をかけて呶鳴つてゐるのは、のみ

、、とり粉の販賣員、其隣には『汗しらず』『清凉劑』『きめよく、色の白くなる美顔水』などゝ云ふ、如何はしい名稱の名藥賣が、各々黄色な聲を振絞つて、喋々と辨してゐるので。

編笠に白金巾の帶、竹の行李を小脇に下げゝのが、聲を張上げて叫出した。

『えゝお待兼の日曜案内、紙數が十二頁で半定價の一錢五厘、社説、講談から狂歌狂句、都々逸端唄何でもある。懸賞畫探しがあつて一錢五厘』と勢よく叫んで居るが、敢へて耳を傾けるものがないので、彼は言を換えて調子を高め、『ベスト豫防で鼠お買上の眞最中、一疋捉つて交番へ持込めば五錢になる、百疋が五圓、千疋が五十圓、一

万疋五百圓、其上懸賞の籤がついて、一等に當れば五十圓だ、本號には米國理學博士ピアホール氏の發明になれる、捕鼠器の製法が載つてある。一夜に千疋を捉ると請合、千疋で五十圓、本誌一冊一錢五厘で習はれる、五十圓が一錢五厘でござい』

果せる哉、好漢巧みに人情の弱点を洞觀したるもので、五十圓の呼聲に四邊の人が簇々と押寄せる、瞬く間に百部近く賣飛して、彼はまた向側で叫び出した。

○に競字の高張提灯が二張、高臺の上に立つた美髯の辨士、白シャツに黒の短胴服、上着なしの尾籠な姿で、辨舌爽やかに叫んで居るのは、メリヤス競賣の外交官である。

蓄音機、肺量器、虫賣、古着屋、古本、植木、と一々書くから巻を代へても出來ぬ始末。御覽じあさい、此横丁を左りに入ると、白衣の妖怪暗中に立ちて、道行く人を惱ますと聞く。されば目尻の垂れた御仁、性根の楔の弛いお方は、迂濶と踏入られぬ所ださうで。

『煩さくッて堪らん、早く行かう』と人種論者弱音を吹いた。

『はゝはゝ前説は取消か』

『謝する〳〵。主義を放棄する次第さ』

歩を早めて人波押分け、傍目も振らず裏坂を上つた。

二人は柵側の長椅子に投げるやうに腰を下した。

夜はまさに十時を過ぎたであろう。後の梢に懸る月が、愛宕塔の尖

頭を銀のやうに照らして、其反射の餘光が社の甍に落ち、梢を漏るゝ光が其所一面、青白の班点を印してゐて、物音絶えて神寂びたる欄干のあたり、椽の下、虫の聲が滋く乱れて聞えてゐる。

下町あたりは未だ宵の賑ひで、幾千萬点の燈火鮮やかに輝き渡り、車の走交ふ音、物賣る人聲、色々な物の音が混交になつて、轟々と鳴渡つてゐる。

満天の清光、水の如く満都の上を流れて、渺茫としてはてしも知れぬ中に、右は品川沖の船の燈火夢より淡く、左の方には、丸の内の森が煙のやうに薄りして見える。

あゝ、諸君幸に心耳を濟して、此清涼の月夜に瞳を据ゑよ、微茫た

る夜色幕の如く垂れてゐる下に藏せらるゝものは、百五十餘万の都人士と、幾億万の財貨珍寶である。高樓大厦に美姫を擁して眠る者あり、床破れ屋根破れたる塲末の巷に、一臠の肉を爭つて、骨肉血を流す貧者あり、千差万別ある社會の現象は、此靜ある夜色の中に演ぜられてゐるのであるが、誰か永遠（エルダニー）に渡る人類の平和を獲るに身を供して、僞文明の迫害と戰ふ者は幾人あるであろう。

都の平和は一國の平和である。都の惑亂は即ち一國の惑亂である。夏の都會が苦しくて、夏の田舍ばかりが樂しい道理はあるまい。

夏の水草

金子薫園

○

おばしまに白き浴衣（ゆかた）のほの見えてほとゝぎすなく湖（みづうみ）の夕

○

三たびまで蓮さく池をめぐれどもほとけにあはず有明の月

○

みじか夜はいつかあらみてあけがたの枕に涼し風鈴

の音

○

妹(いもうと)といちお植ゑたるうら庭にいちお實らで草生ひにけり

○

なやましき頭おさへて呻(うめ)く夜を軒の芭蕉に雨おぼれきぬ

○

蚊遣火の煙きえゆく東雲(しのめ)におぼつかおくも痩せし蚊の飛ぶ

○

塔(あらへぎ)の尖(さき)のみ見ゑて赤げりあふ青葉若葉にさみだれのふる

○

卯の花の垣根つゞきのひと村にまよひ入りたり雨の夕暮

○

うつしゑに香の煙のきゆる夜を雨ふりいでゝ螢とびきぬ（うせし佐々木獨尊君の一七日に）

○

亡き人のうた編みをれば夜はふけて微かになきぬ山杜鵑

午倦一方藤枕　撫琴聽者知音　接客不著衣冠
清晨半炷名香　乞得名花盛開　開甕忽逢陶謝　蘇
隔溪山寺聞鐘　飛來住禽自語　暑至臨流濯足　東
月下東隣吹簫　客至汲泉烹茶　茶塢檽前微笑　坡
清溪淺水除舟　雨後登樓看山　涼風竹窓夜話

夏の深林

正岡藝陽

昨日初めて後山に蟬の聲を聞きぬ。

照附くる日はじり〳〵と燒けつく如く、風通しあしき室内の蒸暑さながら釜中に坐するの思あり。鈍き眼をあげて外面（そと）を見れば、簾外山青く、白衣の人二三來往す。西の方數丁を隔てる深き森蔭の、いとも涼しげなるに、默坐堪へがたうありて、飄然として、家を出づ。

梅雨晴れて間もなき田の、田より落つる水は、おぼ〳〵と氣味惡き音しつ、日の光水に映りて黄金色の輝き、眼を射りていとまぶし。

急ぎ足に畝を通り抜くれば、翠滴らんとする深林は目前一杯に展開せらる。

近くに西洋人によりて建てられたる學校あり。彼の國より來れる十餘の家族は其構内に住めり、學校は森の後ろに當りて、裏門より直に森に通ずるやうにあり居れは、其家の兒等は何時も乳母に手を引かれて此森に來りて遊ぶなり。

余が森に來りたる時には、四十五六のやさしげある日本の婦人と、三十を少し越したらんと思はるゝが二人、各一人宛の兒を携へて、何やらん面白さうに談りつゝありき、其中の一人は四ッ五ッばかりある女の子にて、赭色の頭の毛美はしく背に垂れ、そを頭の上にて

摘みし紫のリボンもて結びたるが、嬉しさうに日本の繪日傘を上下して、勇しく遊びつゝありしが、余の來れるを見て、直にそを止め濃き眉を昂げて、碧の眼もて、あの新らしき客の方をチラと睨みて直に乳母の躰にひしと抱き付きぬ。他の二人は共に同じ年頃の男の子にて、今が惡戯さかりありとおぼしく、二人にて森の中にボールを爭ひてありしが、余の其間をヅカ〳〵と通れるに、自分の領分を侵されたるを不平に堪へぬ顔付にて、暫し遊戯の手を止め、二人顔見合はして苦笑しつ。ろれも暫しの間、忽ち忘れ果てたるが如く、またも森の中を驅け廻りて、ボールを轉し歩きぬ、余は其間を通り抜けて、學校の裏門の方に至りて、苔つきたる花崗石のベンチのや

うになれるに腰掛けて、静にあたりの景色を見渡しぬ。

ふと見やれば、杉の木と松の木との間に一張のハンモックを釣れるが見ゆ。網の目を透して小さき白き衣の見ゆるは小兒の眠れるなるべし。釣網床の大なるに、小さき小兒の入りたるなれば躰は其底に埋れて、殆どあるか無きかを疑はしむ。午下二點講堂の上に設へたる大時計の音は森に響きわたりぬ、そを機掛にハンモックは少し搖れぬ。

余は瞬きもせでそを凝視してありしが、ふとシルレルの句を思ひ出しぬ、小兒よ、大人となれ、汝の搖籃は汝に於て余りに廣きに過ぐ大人となれ、廣き世界も汝に於て狹く見ゆべしと。希望に滿ち、光

明に滿てる小兒こそ、げにうらやむべきものゝ限りなれ、余は大人となることを願はず、願くは永遠に夏の深林のハンモックに靜に眠る小兒たらんか。

喧しき蟬の聲も漸く眠げにありて、果てはたと其音を止めぬ、吹くはそよ風、見るは翠の森、夏の深林は安息の場所也、罪なき小兒の眠るべき場所なる也。

イヴが神の禁せし木の實を喰ひしもエデンの深林也、詩人透谷が滿腔の血を吐いて、世を憤るの餘り自ら縊れしも深林也、人の子が犯せる滔天の罪惡は今より昔に至り、尙其多くは深林に於て爲さるゝ也、罪惡は深林に添ふ影の一也。

嗚呼、深林、人は幻影を追ふて深林に入る、露臺に涼を納れんが爲か、森の泉より滴る愛の水に浴せんが爲か、あらず、あらず、イヴは深林を怨みて誘惑の森と爲せり、透谷は深林を以て永遠の光榮に至るべき途とおせり、深林斯く悲しむべきか、深林斯く忌むべきか。見よ木の間に小兒は眠れり、然れども一の蜂來りて彼を刺さゞる也大風來りて彼を驚かさゞる也、見よ、本の間に小兒は眠れり、安らかに眠れり。夏の深林は安息の塲所也。希伯來の詩人は歌つて曰く『その時には無花果の樹、花咲かず、葡萄の酒、果ならず、橄欖の樹、產空くある』と、國亡ぶる時は深林の荒蕪せる時也、其時豈松の木あらんや、其時豈杉の木あらんや、ハンモックあらんや、小兒

の安らけく眠るあらんや。

深林に神秘のさゝやきあり、小兒の口より漏れて人に語る、深林は安息の塲所也と、深林に神の護りありと。

再び蟬のかしましく鳴けるに、余は空想より覺めて吾に歸り、再び四邊の自然に目を移しぬ、小兒は幾度か身を動かしたれど、尙安らかに眠れり、日は漸く西に沒して、目を放てば地平線上かすかに爲色を染めおせり。余は去らざるべからず。ボールを遊べる小兒を呼ぶ聲おらん、裏門の方に當りて女の叫ぶ聲聞えぬ。嗚呼、眠れる小兒の夢、何時までか驚かされであるべき。

其後余は深く深林を愛するの一人とおれり。

夏の海畔

西村醉夢

われは今、一枚の浴衣に身を包みつ、吹き荒む海風に逆立ちて、凛然として立てるなり。

ひさ〳〵家に歸りたるわれの、昨日、妹と弟とを携へて、暑さを避けんとて、此の濱邊に來つるが、妹は昨宵の歌合に疲れ、弟は母ある人を夢みてや、まだ旅寐の枕に就けるならん。

日頃は朝寐のみして、蕣花のさき盛るを見しあとあきわれの、今日は松ふく風の聲、岸うつ濤の音に眼を覺まされて、あはたゞしう衾を蹴て起き出で、海づらにさし昇る旭日の光を眺めばやと、海岸

に出で來つるあり、されど、夜はまだ明けやらず、沖より吹き來る潮風の、肌寒きまでわが浴衣を掠めて、冷氣さあがら秋の如し。

何處の家の鷄か、松の林を隔てゝ、いと勇ましげに、うき鳴けるが聞こゆ。

われは、しばしか間散歩せばやとて、怪しげある下駄に、珠の如き眞砂を蹴ちらかして、南へ南へと歩を向けぬ。

やがて、松原のあるところに出でたり、われは松の木の大きあるものを選び、その根に腰かけて、明けはあれゆく海面を見渡しつ、自然の美のいとゞ壯大にして、人工の力のとても逮びがたなきを想ひぬ。吁、ミケロアンゼロや、ラフハエルや、ホーメルや、鑿（のみ）の韻（にほひ）

筆の彩、心の馨、人の世のものにあらじとて、幾多藝術を好む人をして、恍惚として魂を銷さしめたりけん。されど、造化の神のなせし業に比べては、げに雲泥の差あるを見るなり。ソロモンの榮華の極みの時だにも、野花一莖の美に若かざりしとは、いみじくも能く云ひたりけるよ。嗚呼、たれか、此の塵の世に神の俤を移して、幽韻縹緲たる創作を出ださんとするものぞ。夫の自然主義と稱し、超然主義と稱するもの、そも〳〵何を標準とし、何を目的とし、何を渇仰して恁くの如く絶叫するやらむ。

　ああ、美の神の懷に眠らんとするもの、その頭を惱ますなかれ、その胸を痛むるなかれ、たゞ、來りて海畔の眞砂地に蹲踞し、自然

の大油畫に就いて眺めよ、そこにはミューズの笑まはしき面わをみとむるならんか——。

　仰げば星かげは。何處にか消え去りて、東の空やゝ白みぬ、黑ずみ渡りし海づらは、次第〳〵に暗黑なる色のうすらぎゆきて、濃き藍の色を溶かしつ。浪の音は、いよ〳〵高く、風の聲は、ます〳〵勁く、鞺々嘈々として、無弦の琴を奏づること急なり。

　海上はるかに、一帆のかゝるを見ぬ、つゞいて五六のいざり舟の陸を離れて沖に乘り出すをも認めぬ。

　かくて、われは、ふと人文と海との關係につきて、想像をめぐらし初めぬ、あゝ此の、伊勢の海！、此れはあれ、かつて天照大神が

『とおよの、しきおみよするくに』と宣ひつるとおろにあらずや、志摩の荅志と、三河の伊良胡とによりて灣口をおせる、鏡のおとき內海にはあらずや。倭比賣命が『ふたゝび見る』と宣ひし二見が浦、俊成卿が、『けふとてや、いそな摘むらん、いせじまや、いちしの浦の蜑の乙女子』と咏みし香良洲浦、在原業平朝臣が『おほよどの松はつらくもあらおくに、うらみてのみもかへる浪かお』と謳ひし大淀浦など、みお此の中に包まれたるにあらずや。

海のあるとおろは、文明のあるとおろ、海に沿へる國の疾く開くるは、今さらくたゞしく云はでもしるきところなるが、いはゆる『かみかぜの、いせの國』もまた、つとにひらけたりしものゝ如し。

國史備はりてよりは、言ふの要おし。太古既に或る人種（コロボックル？）の捿息せしおと、夫の下總、伊豆、相模、紀伊、土佐、薩摩、大隅と均しかりしなり。げに是れ等の國々は、みお太平洋に面し、前に黑潮を控え居れば、潮流によりて船をやりし當時に在りては、必ず肝要の航路たりしに相違おし。

さればおそ、高天原族も、夙く既にその名を知り、雄略の朝には早くも、遠つみ祖、天照大神をいつき祀るに到りしが、風光の明媚おるおと、また人口に膾炙したりけむ、『萬葉集』には『いせのうみ澳津白浪、珠にもか、つゝみていもが家づとにせむ』の歌あり。

これより聯想は聯想を胎みて、腦裏いたくもうち乱れ、昏々とし

て醉へるものゝ如くありしが、一しきり、勁く吹きたる風に覺まされて、夢驚かされたるものゝやうに、われは、忽然としてわれに返りぬ。

やがて、東の空は朱の色を染め、横雲俄かに動めきて、見る〳〵紫、紺、赤、樺とかはりしが、終には輝ける金色を彩りつゝ、日は雲の羽袖を破りて、その半身をあらはしぬ、かくて金箭無數燦として水面を射る。

夜はあゝに全く明け放れたり。

わが立てる松原も、眞砂地も、海も、家も、あと〳〵く金の色に匂ひ、理想に夢みしゴールデン、エーヂの、現在あゝに現はれた

るがおとき心地して、わが胸はいとゞ清々しきを覺えぬ。

吁、世の菫、蝶、露に醉へる詩人よ、遺傳病なる平安朝時代の夢を醒まして、壯大豪健なる自然の大觀に醉へよ、『萬葉集』と『金槐集』との二歌集を除いては、殆んど誰もが謳はざる海や、灘や、あれ詩神がわれ等に賦與せし絶好の詩題にあらずや、やよ、女の如き詩人、その眼を刮して試みに見よ。

紫の色に匂へる菫、珠を貫ぬける露、もろ翅やさしく空に舞ふ胡蝶、そは美はしからざるに非ず、されど、されど、皆是れ、優柔なるものにあらずや、狹小なるものにあらずや、根が花の一莖、水の一滴、虫の一羽なれば、それによりて美を感受したりとて、多寡は

恬り得べきにあらずや。山を見よ、海を見よ、壯大なり、雄渾なり豪健なり、男子的なり、花に醉ひ、月に泣けるものゝ、夢にも知らぬところあるなり。

山は靜かなり、動かず、海は靜かならず、常に動けり、動くものは、是れを動かざるものに比ぶるときは、その變化すくなし。變化多きもの必ずしも美にあらず、されど、われは海の、日ねもす夜すがら、動よめきて、しばしが間も休まざるを喜ぶものなり。怒る浪、逆まく潮、岸を打ち岩にふりて、乱れて碎けて、珠となり玉となり、たゝえては濃藍の色を溶かし、奔つては純白の素を沫す。色彩や、遂に海水の美にして、且つ壯なるに若くものあらざるなり。

殊に、一万噸のいくさ艦を泛ぶべく、四千ノットも連れる海の、はてしなき樣を眺めやりては、誰かその力の偉いなるに驚かざるものあらん、われは、實にかの力美なるものを、此の海によりて發見することを得るなり。

雨の夕べ、雪の旦、海畔の景色のくさ〳〵に變りて、美はさらに美を增し、壯はさらに壯を加ふるは、問はでも明らけきあとなるべしと誰も、われ等は海の美は、夏をもてその極致とし、夏は亘をもて、その尤なるものとし思ふ。

人爲狂へる都の中に在りて、若葉青葉の色に初夏の美を賞ふるもの、來りて一たび海原の旦のさまを眺めよ、さながら太古の混沌た

る時代にかへりて、われは高天原より、あまのいは船に乘りて來るらんやうなる心地すなり、あゝ世に雄渾崇高なる景情はあまたあれど、而も海のおとく、雄渾崇高のものはあらざらん。

海はげに、人の世における、サブライムの極致あり。

空想の幻界より離れて、再びもとの吾にかへれば、われは松原のうちに佇みたるまゝ、偶像のやうに、身動きもせで居たるありき。

妹も起き出でつらむ、弟も起き出でつらむ、年幼きものに待たすはあはれあり、いざとて歩を運びて歸りぬ、道はいづれあらぬあれば、昨宵の滿汐によりて、美くしう平らされたる浪うち際を歩みつ

われは先づ第一痕を印せばや、と、怪しげなる下駄に皓砂を踏めば

屐齒の跡二の字を引きたり、後にて此處を通らん俳人の、若しか一句にても咏みたらんには、如何に嬉れしからましあど、稚兒の如き想を繰りかへして、漸く、松間のわが宿に歸りぬ。

見渡せば空は、青く澄み渡りて、また一ひらの雲もあし、今日の暑さは如何なるべき。

何とはなしに、浴衣の袖を丸めて、『水調歌』を謳ひつゝ門を入れば、しげれる松の木の間より、わが妹の手招きするを見ぬ、弟もや起きつらんと、思ひながら、飛石傳ひ乾房にゆけば、妹の袖にかくれたる弟の、舌を出してにこ〳〵と、打ち笑へるがをかしかりき。

あれ、わが曾て香良洲浦に遊びし折の、日記の一くさりなり。

夏の放言

崑崙山客

夏は暑いもの、冬は寒いものとは、小學讀本によりて始めて合點せしにあらず。そもや、おッかさんの乳が一番甘かりし頃より承知せしおとなれは、今更驚くにはあらねど、正直なる寒暖計が、人の氣も知らずに九十度に上れるを見ては、額を流るゝ汗の火の玉かと覺えて、障らば火傷やせむ、恐しきことならずや。

夏はいかにして生活すべき？、あゝ暫くの間人の口にうるさき問題なる可し。されど我輩にとりては、此答辨は極めて簡單也、よく勉めよ、只斯くの如し。乞ふ少しく之が解說をなさん乎、熟〻惟る迄

もなく人生は五十年、日に積れば十八萬なにかしと云ふ。若しうら若き身の前途を望みたる時や、限り知られぬ長さを覺ゆれど、さて四十の坂を越えて、常盤の松も霜ふりの色變りたる人に尋ね見よ、誰しも幻のはかなき影を追うて、夢、現、くだらぬ寢言を云ふ間にウッカリ年月を過せるものゝみ也。例はゞ新橋より神戸までは、四百哩の長さ、阪一つ越すだにも、息はづます身の、いかにして達すべき、あとゝ餘計の心配は御無用。開けゆく世の鐵に足が生ひて、飛脚の勤をする瀛車と云ふ世話好きあり。至る所の峻山大川、目先の變る活動寫眞と眺めて、ヒーロ一箱吸ひきらぬうちに達すべし。驚き給ふな、光陰と云ふ先生、瀛車と競爭して、五十年の長き道の

りの直行、夜の停車場に小憩するのみあるぞや。世は斯く迄に忙はしき上に足許を見れば、世界は圓きものと云ふに非ずや。お互に淺草六區の玉乘りの、あぶあき曲藝に、智惠袋を肥し金庫を増さんとせば、いかで心を風船玉に入れて、風のまに〳〵ヒィラリ〳〵、天氣具合で始終心を動し、寒いと云つては炬燵にもぐり込んで人情本と首引し、暑いと云つては、氷屋の二階に下宿するやうでは、嗚呼豎子遂に何をか成し得んや也。

何事も心の持ちやう一つ、昔有〝畫〟北風圖〟者〟、盛暑張〟之、滿座都思〟挾〟纊。とは決して理に落ちた言葉にはあらず。あに糞、暑いたつてどうあるものか、といふ勢で、お天道樣にタンカの一つも切つて

おらうじろ。苟くも無神經にあらざる以上は、暑さを感ぜぬ事はあかる可けれど、決して〳〵凌ぎ切れぬなどゝいふ事はあし。疑はゞ之を事實に照らすが一番也。巾狹き帽子に日は漏りて、玉あす汗を拭ふ可き手に梶棒とる車夫や、蒸氣の釜の前に、のべつ幕なしの働きに、煤烟食つて生活する職工や、まあと見るも氣の毒あれど、彼等が斯る境遇に在る爲め、死んだと云ふ事は、瓢簞より鯰を出す新聞の三面にも出た例があく、井戸端會議の立聞にすら耳にはいつた事なし。斯る勞働、斯る境遇、斯る社會、尙ほ御覽の通り立派にやり通すことが出來るのに、いかある理由あつて、彼紳士とか、官吏とか、學生とか稱する輩は、それ夏が來たと云うて、隣りから火事

が出やきまいに、仕度そこ〳〵逃げ出すぞや。紳士あんてあ奴は云ふだけ野暮あがら、官吏先生も隨分忌やにある代物也。朝九時、晩四時、美濃界紙に墨をぬれば、職務は立派に濟む、それも先づ〳〵よしとして、前掛に角帶締めて、いらッしやいの調子でなくッちやあらねい者が、洋服着て、髯はやして、ハイカラーつけて、煙を輪に卷いて、ろり身にあつて、オホン人民が!!!。すばらしからずや、氣障ならずや、癪に障らずや、忌やにあッちまはずや。而して其所謂人民が汗水たらして働く時は、人民の便宜を計る可き役目あらば、矢張り普通に常に變らず仕事をあすべきに、誰かあんあ特典を設けたのか知らあいが、彼等は之を可い事にして、やつと俗務より免れたあどゝ、大俗物の標本めらがほざく。癪には障れど規則とあれば仕方あし。せめて休み中だけでも勉強して、骨斗りあ頭に滋養物をつぎ込めよ、さらずば、岩谷天狗の内職でもやつて、細君の仕事を手傳ふが肝心也。

お鉢は廻はつて、學生諸君にいざ言問はん。春あらば都鳥の行へでも探す筈だが、先づ刻下の大問題、夏の生活に就いて論ぜんに、凡そ天下諸君の如く、氣樂ある境遇はあらざる可し。親の脛てふいくら食つても盡きることあき物に、命を維いで居るあとあれば、生活の難儀といふとは夢に周公を見ず、論語には書落したれど、浮世の荒き波も、下宿屋の門斗りは、遠慮すべきものありとよ。而して日々の

勤めといへば、三時間乃至五時間の昇校、これにて制服の手前の義務は濟ねど、其有する權利は、牛屋の食荒し、寄席のドースル、廓のコラヨーの車、一々數ふべくもあらず、金文字入頗美本は、新聞の廣告に僞りおうして、机の上おそ金碧燦爛たれ。引出しより折々出づる寫眞は、そもや何物ぞ。曾て勸工場で見たおとのある樣だがいかおる親類筋にや、區役所の戸籍係にも分らぬ素性おるらし。此半季には京子はどおへかゝるか、若竹には友の助がくるだらうおんぞの研究は、終始絶ゆるおとなくして、友三人集れば、今夜は、……の進擊との緊急動議には、讀會省畧して、四疊半一致の可決は、恒松進行博士も及ばぬ手際也。而して斯るやからは、湯島あたりを

中心として、神田、本郷至る所に轉がり……固より拾ふものもおし……居りて、たまには、苦學力行、涙のおぼるゝ程感心おる人もあれど、そは大海の一滴、所謂話せぬい人間なり。うたてき事の限りおらずや。

惟みるに、夏の休暇なるものは、暑い時おれば先づ休んで、平生苦學の勞を慰するといふ趣旨、今更云ふ迄もなきと乍ら、當時の學生がおんお風にては、休暇が抑々何の効力ある。之が平生なまけた報酬としては、平壤逃げし褒美に、大官を得たる葉志超よりも難有き事也。而して彼等は六旬の休暇を如何にして送るかと云へは、地方に歸るものゝ多くは、流石に水道の蛭を食つて大きくなれるおとゝ

て、いやらしき東京風をやたらに吹かし、怪しげな東京辨をあやつりて、純朴、神代より、とッてをきの美風を、一重々々に剝ぎ去る也。十年前已に隣りのお多福、深張傘を持てり。向ふの多吾作、其猪首にハイカラーをつくる、三年の後を待たざる可きか、誠に困まつたもと也。殊にをかしきは、文學をやる人々にて、先づ東京の近傍あらば、鎌倉とか江の島あたりに遊びて、夏を送らんと大氣取りに氣取りて行く。指には金の輪、胸には金の鎖、眼には金の緣と三拍子揃はねば、どこへ行つても、お座敷は塞がつて居ります、どうもお氣の毒さまなるに、大に厭世の志を起し、澁々門を出づる時、餘りの恨めしさに見上げた二階の欄干に、身を寄せたる少女美にして艶、心は飛立つ斗りに、言葉交はしたけれど、上と下と離れてはそれも思ふまゝならず、茲に於いてか更に失戀と云ふものを胸に湧かし、人氣なき海の畔り、岩の上に横はりて、われは失戀に泣きぬとホロリとあり、リーダーの一を讀まぬ身にても、流石にセークスピヤを、おぢさんに持てるおとゝて、ハイネの詩集を倒まに開きてあゝわれは死ぬべう覺えぬと、大時代に愁嘆するとき、どッと岩を打つ波の音に、あわてゝ逃げだすは、此死ぬべう覺えたも、隨分あやしきもの也。

心のまゝの惡口に、話は大分横道にそれたり。いざ本論と云ふ迄もあく、起承轉、已に云ひつくしたれば、結句は御承知せられたるな

らん。平仄の合はぬも、我輩一流の新詩躰、あれも大目に見て戴くが、幸に我輩の丹心を酌み給へる人は、あたら青春の時を空費せずして、職務に勵み、修養に怠り給ふな。あにも、土用の眞最中に、鎧を着て武裝の文士なんて馬鹿げた眞似をせよと云ふにはあらず、太陽といふもつまりは石魂より出來た代物、苟くも萬物の靈長とも あらう者が、そんなやつに、へまされては、第一我々を製造した神樣にも濟まぬ道理、只々自分の行末を思うて勉むる所を勉むれば それでよし。乙羽屋の臺詞ぢやねいが、わッちの躰は弱くッても、日干にやなりやせん。先づあんあものさ。

夏の温泉

登坂北嶺

夏はまつ温泉あそ。山青く風鮮き邊、榻を松下に移して閑に白雲を觀る、豈銷夏の好方法ならずや。さはれ、我は今都人士の、名を避暑旅行に假りて外觀を粧ふはまだしも、甚しきは債鬼の來襲を避くるの手段とするが如きは、固より好む所にあらざるあり。熱海や、伊香保や、塩原や、草津や、是れ宛然たる豪奢の競爭場、山高きも、水深きも、何ぞ人の腐腸を洗滌するに足らんや。

我は恒に異む。多くの紳士官吏が、貴重ある暑中休暇を這般俗化場裡に消して自ら快とするを。

想ふに、諸子は、口に美味を欲するならん、目に艶窈を欲するならん、はた、耳には絃聲を、鼻には蘭奢を欲するならん。山や、水や雲や、林や、いかに幽邃に、いかに雄偉ありとも、毫も顧る所にあらざらん。何となれば、諸子は、既に自然に對して自ら賞翫の權利を抛棄したるものなればあり。

さらば、我所謂温泉とは何ぞ。他なし、たゞいまだ人巧を加へざる自然のそれをいふなり。

あゝ、自然なるかな、自然なるかな。我は藝術美の重ずべきを知らざるにはあらざれど、しかも、今予が今語らんとする温泉の殆ど圓滿にして醇化を加ふるの余地なきを思へば、再び大に自然の美を叫

ばざるを得ざるなり。我を以て、妄に國誇りするものと做す勿れ。我は總ての自然に對しては、公平なり、無私なり。北越の地、由來山水の勝に富めりと雖、交通の不便なるを以て、いまだ天下に鳴らざるなり。

さはれ、我はなか〳〵其鳴らざるをおそ嬉しく思ふなれ。何となれば、鳴らざる時おそ眞の自然を味ふを得べければなり。

我菖城を去る六里、五頭山中一靈泉あり。傳ひ云ふ往昔弘法大師の創むる所と、其名を出湯温泉といふ。

我は自ら市隱と號するものから、あほ、人生の意義に想ひ到る毎に常に山中に入るの養神に利あるを知りぬ。さはれ、我を以て、彼の

片々たる一派の厭世家と同視する莫れ、我は不敏なりと雖、猶彼等と伍するまでには愚ならざるなり。

我は此温泉に浴せしあと前後四年、毎遊約一ヶ月を以て期とせりき。曾遊の風光忘れんと欲して忘るゝ能はず、半夜机に凭りて瞑想すれば、其山水恍として眼前に徂徠するを覺ふ。轗軻の遊子、今や風塵に老いて都門に漂浪す、其清容を緬想するの情何ぞ切ならざるを得んや。想ふ、昨庚子六月九日、我は行李を整へて、獨り其温泉に自然を味ふべく車を走らせたり。

途は單調なる平野を過ぎて、漸く山中に入りぬ。一曲一展、山腰を廻り、峻坂を駈け、林に入り、溪に下り、眼前の光景、轉變端倪す

べからず。既にして、途は出湯の仙寰に入れるを知りぬ。そは此地の特色として、水の清と、石の奇なるとを見ればなり。

水と石と、あれ實に此山中に於ける自然が唯一の色彩なり。山居の經驗あるものは、皆水の清冽にして、しかも遍きを知るならん。草がくれより鏡の如き清水の小さく見えたる、竹の筧より苔の下水の細く傳ひ落つる、水車小屋より、白くちら〳〵と流れ出つる、懸崖より高くたぎりおつる、あゝ、水の美觀は少からずと雖、石の奇に至りては蓋し尠し。

いで、我は、是より　石の奇を說かむ。

大なるは疊十枚位にして平坦青苔の滑かなる、或は頭上に聳えて今

や將に落ちんとする、或は礌砢として道路に横りたる、或は種々なる動物の態を爲したる、千態萬狀形容すべからす。我は、實に自然の斧鑿の巧妙なるに驚かざるを得ざるなり。

車は轅を洞春館に下しぬ。館は山の半腹の平地に在り、構造美なるにはあらざれども、其瀟洒たるは、正に山中隱士の居に適せるを覺ふ。我は庭前の石磴を踏みて、一段高き山上の離亭に導かれたり。石の奇は正に此庭園に於て見るを得べし。其石磴は悉く一枚の岩にして、中間に一大橋あり、巨岩と巨岩との間に架せり、其質また石、遠く之を眺むれば、宛然大雅畫中の趣を具へたり。

我は、此橋を渡りて、まつ旅裝を解き室に入りぬ。六月とはいへど

山里は、まだ嵐さむく、廂を掩へる若楓を洩れ來る日影は、いと弱う力なげなり。

椽に立ちて前面を眺むれば、眼界遠く曠けて、田村の茅茨黑子の如く、右方には五頭の山脈低く流れて、頂上の松原最も雅趣あり。左方は直に五頭の攢峰屹立して、危松の女蘿身を纏はんとせり。其欄干の下には、ものふりたる杉の木立ありて、茅葺の家根のほの見ゆるは、華報寺といふ禪刹なり。

我は滯留中、毎に此禪刹の若衲を訪ひて、禪道の妙諦を聽くを以て無上の樂とせりき。故に我は今此家根を見て、早くも諄々として道を說けりし、彼の廣額の若衲をおもひ出しぬ。

温泉は此館の母屋の後にありて、湯槽は二つなり。温湯にて其澄徹比なく、底板の杢目まで、明かに認むるを得るばかりあり。

二三日はわけもなく暮らしぬ、持ち來りし詩集歌帙を繙きつゝ。

四日目の夕方、我は久し振に彼の若衲を訪ひぬ。彼は年齒いまだ廿歳前後、曩に東都哲學館に入りて業を修めたるもの、村人皆其操行の高潔なるを歎美せり。我は今の末世に中りて、此聖僧の能く持戒するあるを歡ぶの情に堪へず。是我が彼と恒に道を說き理を談じて時の移るを知らざる所以なり。

談は端なくも、希臘哲學論に入り、延いて東西思想の異に到り、果は妻帶論に及びし時、彼は、熱心に、經說を引いて、僧侶の無妻なるべきを主張せりき。我は之を聽きて、少からぬ感動を起せり。それは、我も現に無妻論を思惟しつゝありければなり。

されど、我は、猶我胸中の秘密を語りいでんまでには大膽あらざりき。たゞ、いかにも、我種の境遇にては、無妻の心安かるべきを思ひしのみ。

我は岫を出つる白雲を眺めて、低く歸去來の賦を誦しつゝ、洞春館の柴門を開き、靜に庭園を散歩せしに、母屋の東方なる十疊間の青簾より洩れ出つる　琴の音！。

其動靜を窺へば、二三人の女客らしゝ。我は池邊の陶製の椅子に腰かけて、斷崖より直下する瀑を眺めつゝ、飛沫の顏を拂ふ涼さに餘

念おきをりしも、山颪一陣、颯と襲ひ來りて、浴衣の裾を拂ひし餘りは、彼の青簾を吹き颺けたり。ちらと一目よ、げにもたゞ瞬間の其姿！。思ひもかけぬ此邂逅、我は必ず其人にあらざらんと思ひぬ。否、切に其人にあらざらんことを祈りぬ。されど、何となう胸騷ぎて、もしやと不安の念に堪へずおりぬ。

良ありて椽の杉下駄を穿ち、左手に唐銅の水刺を持ちて飛石を傳ひ來りし老婢!!。さは紛れもなき彼の家のものおり、げに彼家の股肱の女中おるおり。もはや、疑もなく彼の人ならん、否、たしかに彼の人おり。聞馴れしかの奥の手の妙おるは、とても、紛るべくもあらねば。あゝ、我は何とせん、此胸のみだれをいかにせむ。

我は忽ち踵を回らして、直に室に戻りぬ。しひて樂天の長慶集を繙けど、たゞ彼の琴の音のみ、あやしう胸の絃にひゞきて、さおがら夢の域に彷ふが如し。

翌朝は、いつよりも早く目さめたり。昨夜の煩悶も少しは薄らぐ心地するほど朝露の清きに、襯衣のまゝ、手拭さげて芝生踏み分けつゝ、石磴を下れば、岩陰に薔薇の一叢、香高く淡紅色に匂へり。あまりのゆかしさに一枝折りとれば、葉末の白露はら〳〵と足の爪先に零れて、いひしらぬ冷さは骨に泌みとほるばかりおり。其香をきゝながら池を繞りて、湯槽に至れば、いまだ一人の浴客もあらざりき。

出湯の温泉といふは二ヶ所ありて、此館の湯は、あゝの浴客以外に入るを許さゞるあれば、此の如く靜なるあり。我は温き湯も、朝は稍熱く覺ひて、肌に快き爲、いつしか湯槽の縁を枕にして、うと〳〵と夢に入りぬ。朝戸出の雲は刎窓を鎖して、いまだ浮世の消息の通ふを許さざる時。

人のけはひするに驚きさむれば、眞向の衣桁には、粹なる千鳥型の浴衣と紅梅の扱帶とかゝれり。はつと思ひて傍を見れは、あはいかに、げに、あはいかに、二人の婦人の浴し居たるよ。

我は決して婦人に驚くものにはあらず、然り、いかある美人ありとも神を蕩するものにはあらず。されども、たゞ此人のみに對しては

到底寸時も相見るに堪へざるあり。其故は語らざるべし。たゞ、意外ある邂逅の期を與へて、空く往時の失戀を想起せしめたる造化の惡戯をかあたんのみ。

何の爲に來り玉ひしか、今は良人ある身の、何として獨り來玉ひしか。さはれ、我は無謀ある想像を逞うするあとはあへてせざらむ。

我は忽ち湯槽を出でゝ、石磴に跌きつゝ、辛くも室に逃げ込みぬ。

今宵雨來りて、松濤軒端の白雲に響き渡れり。琴の音は紛れて聞えず、靜思默坐、深くかの若衲の言を味ひぬ。

翌朝給仕の婢にとへば、彼の人は、たゞ心地勝れずとて來玉へるありとか。あゝ、さなりや、さなりや、何か爲に心地勝れ玉はぬにや

あゝ、實に、何が爲に。

午后は、雨稍はれゆきて、雲は低く遠里の方に搖曳せり。山氣身に浸みて、やゝ浴衣の寒きを覺ふる時。嘹々たる琴の音は、瀑の音に誘はれて、遠く、幽く、あゝに響き來ぬ。あゝ此細き音には、いかなる長き意味かあるらむ。

我は何とあう心あわたゞしく、山居の閑寂は全く空想に過ぎざりき、そは舊き疵の再發して、此弱き子の胸を痛むればあり。

あくる日より、其の琴の音は聞えずありぬ。否、永遠に聞えざるべくなれるあり。かの雨後細く瀑の音に混りて聞えたるは、げに、我生涯に於て最後の妙音あらんあり。

されど、我胸は其日より、やう〳〵爽かに快うありぬ。我は毎朝毎夕、松籟を聽き、竹影を浴びて、かの若衲の談理を聞くを喜びぬ。いつか塵の子の身あるをも忘れて、まあとに道家の侍兒の如き心地にありぬ。

一月の日子もいつしか過ぎつれば、我は惜くも、此石奇に水清き仙寰を辞したり。腕車坂を下る時、顧れば彼の舘は小さく斷崖の上に現れたり。そこには瀑あり、池あり、また　彼の琴を彈き玉ひし室もあるあらずや。

想へば、既に一星霜を經たる今日、山中の靈泉に俗腸を洗ひたりし兒は、今や自ら好んで紅塵萬丈の裡に狂奔せり。我は、今更に、

昨非今是の感に勝へざるあり。

あゝ、懷しき出湯の温泉よ、自然の美觀を持して毫も俗氣に汚されざりし出湯の温泉よ、はた無二の慰藉者なりし出湯の温泉よ。（完）

消夏の秘訣はそれ觀劇なる乎、凡そ天下、人の精神を奪ふもの劇の如きはなし。技者一度扮裝して場に上るや恍乎我れを忘れて場中の人となり、背後に炎熱の驕魔の潜るに意及ぶもなかるべきなり。宜なる哉、京地に巍立する幾多の劇場は、盛夏八月の候、尚ほ幾千の觀客を招きて、盛況を極めつゝあるや。（川上贇次郎）

夏の追懷

奥村梅皐

（一）

學にたづさはる身の、閑とてはあけれど、夏期三旬の休暇を得たれば、さばし身を雲水にまかせ、泉石の聲に親まんと、七月の十五日、蒸暑き都門の喧鬧をのがれて、濃藍流るゝが如き交野山の麓に歸りぬ。こゝは則ち余が故郷の地なり、あばら屋百餘戸、禿山焦田のうちに臚列して、あたりの景色見るからに物淋しきがなかに、余が住家は軒落ち扉朽ち、雨痕ひとり舊時の名殘を留めたる、見る影もなき一軒の茅屋なるなり。

されどそこには、あつかしき余が父母の居ますなり、そこには、肉を分け血をわけたる余が兄と姉とあり、そこには、福々しき頬の、喰ひつきたき程かわゆき余が弟もあれは、暖たかき愛情もてる彼君も居給へる也。余弱冠故里を辞してより諸國に遊び、青春の氣漸やく熟して恨愁ます〳〵病軀に逼まり、爲すこと多く失敗に歸して、世と俱に迚如すること茲に幾歳、われを知れる友なきにあらねど、友はわれの健康を喜ぶの外、我れの憂へを分つこと能はざりき、憂愁、怨恨、困頓なる我れの身境を心から憐み、心から慰め呉れたるものは、父母の外、實に我兄と我が許嫁なる彼君とのみなりし。我れかく無量の感にうたれて、懷舊の情禁じ難く、人知れず涙をすゝりて我れ知らず我家の門に蹈み込みぬ。

（二）

其日の暮なりき、浴後、われは彼君を促がして近郊をそゞろあるきしぬ、新涼水の如く衣に浸して竹を拂ふの風、喨々秋の聲す。村はづれの小橋を渡りて、田のあぜ路を北に拾ひ、せゝらぎの流に沿ふて行くこと三四町にして堤路に出づ。石橋の上に二たり無言のまゝ立ちぬ。西山に落ちそこねたる雨雲の、僅かに夕陽一綫の名殘に染め出だされたる、うす紅、うす紫、うす茶褐色など、種々の色彩をおもしろく眺めつゝ、余が嘗て京洛に在りし時、秋の初、獨り清水の棧橋にもたれて落葉伐木の聲かなしきが中に、夕陽をながめて萬

斛の悶を遣りし時の事を思ひ出だして、感盡くべくもあらざりし、余は思はず彼君の顔をあがめやりぬ、彼君訝かしげに我が顔を見つめぬ、一しきりの雨に打惱まされたる秋海棠の、それにも似たる風情にて、

『貴公何んとか給ひしぞ』

無限の感に搔亂されたる余が胸は一段の動悸を增しぬ、彼君は余が愁はしげなるおもゝちを見て取りたるなるへしと思へは、故らに聲を和らげて、

『余は去年京浴に在りし時、今のやうなる夕榮の雲を眺めて痛く世のはかなきに泣きたる事を思ひ浮べて今昔の情禁へがたうありたるあり』

余は故らに低き調子をもてかく言ひつゝ、又言を續けぬ。

『御身何んと思ひ給ふぞ、彼の夕榮の雲を見たまへ、ぱつと一明り染出されたる色は、濃紅の燃ゆるばかりに美はし、されどそれは一瞬時ありと知り給はずや、たとへば人の榮華を極むるも其れと同じ事、眼前の榮達のみを求めて終生飽き足らず、戀を得、位を得、富を得て猶心の滿足を得ざる人の、いかに愚にして憐れむべきものなるかを知り給はずや、榮華は一時なり、戀や位や富や空のみ、かく觀れは人生もまあとに賴み少なきものなりかし』

嘆息、俛首、憂鬱、あらゆる余が心の愁ひを示したる時、彼君は無

言のまゝ、痛く感じ入りたる樣子にて、余が側に寄り來らんと仕給ふを輕く拂ひつ。

『余は御身を愛せざるにあらねど、痴情を以て御身を迎ふるあと能はず、愛のためには、全べての礙障を排するの勇氣あきにあらねど、愛にほだされて、畢生の志を失ふ如き愚は學はじ、余は富貴、顯位、黄金を欲するの念なし、たゞ清き愛情もてる御身と、純潔なる生活を送りて、我れは長へに神の如き心を失はざらんと欲する也、ソロモンの榮華は棄つるに難からじ、風情もあき野に露を連ねて咲き出でたる白百合の花を手折りたる余は、無駄に打捨つるに忍ひざる也』

彼君はいかに感じ玉ひけん、熱き涙の二ひら三ひら、星のやうなる眸もて、物思はしげに余の顏を見守りぬ、しかも堅く余が袖に取り縋りつゝ。

今しも山の端をいでし新月の影薄く雜株のうちより洩れて、蕭然として橋上に立ちすませる二たりの影を微かに照らしぬ、風靜かにして後丘の松聲夢を載せけむ、あたり人語絶ゑて夜はいたく闌けぬ、冷やかなる草葉の露を踏み分けつゝ月の光に嘯きて歸りぬ。

これをとゝしの夏の事なり、しかも余が過去行迹の種々あるうち、尤も深く余が印象に刻まれたるは此事なり、思ひ出でたるまゝを記しぬ。

拜　啓

花峰生

今回同人の作を集めて『青葉影』出版の由、小生にも何か書けとの仰せに候へ共、筆を捨てゝ茲に二年、昇平の世、再ひ無病の呻吟をなすに堪へ申さんや。切に寛恕を仰き候。

輪蹄の響、爭鬪の音、觀じ來れば箏笛となり、琴筑とあるとぞ、市に在る大隱の心事はさるあと乍ら、胸を清波に洗ひ、目を青山に拭ふの快は、萬乘の富にも易へ難し、西野の里は小生の墳墓の地たる可く候。京に上れとの御言葉、今は只謝する斗りに候。

滔々たる丹次郎君一流の青手文士を眞似ねて、失戀とかの疵を癒さ

んが爲めにもあらず、唯都つまらぬく、乾き切つた涙氣のなき空氣が忌やさに、遙ゝ茲に來て見れば、浮世の除外例となりし、神代乍らの美風、見るからに嬉れし涙が滾れ申候。村社の大皷に夢を破りて、心の儘に朝氣色を貪るも、誰一人乱次なき寐卷姿尤むる者もなく、晝は屋後の小園に、花を剪み木を接ぎ、心ゆく斗りの緑の色に目を恬ましめ、夜は漸くあれそめし小犬を携へて漫歩すれば、名も知らぬ農夫三四、我を見て勃率として、野語亦憚る所なし、歸り來りて椽側に据し、一壺の酒に陶然として、得意の追分を歌ふ。誰に聞かせんとの野心もなく、亦必ずしも我を慰めんとにもあらず、唯飲み、唯歌ふのみ、一日、又一日、小生の近狀語れよとあらば斯く

の如く語る許りに候。我黨の諸賢、西は薩南の健兒に結び、東は東奥の士と力を協せ、二大表幟を捧けて文壇に蒞む、天下靡然として皆其風を學ぶの時、小生微力を盡さんと欲せざるにあらずと雖も、敗軍の將は兵を語らず、況んや、轗軻屯蹇、羸弱の身を以て遂に何をか成し得可き、小生は小生として暫く若隱居の境遇に安んぜしめられ度候。

猪苗代湖迄は、僅に五里を隔つる許りに候、近日後藤宙外君を訪問致さんと思居り候。併し小生は六ケ敷文學談などを聞かんとてには あらず、思想惑亂の時代なんて出られては逃げ出すより外無之、小生は唯都の紅麗に脊いて田園生活をやらんとの志が嬉しく候。さるにても君は小説家なりと云ふに、お歳はいくつか知らざれど、東京の表裏を知りつくして、田舎の研究にかゝれる者とすれば、誠に大したものと感服仕候。

申上たき事山の如く候へ共、諸賢の煩務を妨くるを恐れ、あれにて筆を止め申候、早々

螢火や吹とはされて鳴のやみ　去來
闇の夜や子供泣出すほたる舟　凡兆
螢見や船頭酔うておぼつかな　芭蕉

青葉蔭　終

明治三十四年七月十一日印刷
明治三十四年七月十三日發行

定價拾五錢

發行兼編輯者　佐藤儀助　東京神田錦町二丁目六番地
印刷者　池田良藏　東京神田錦町二丁目三番地
印刷所　知足堂　東京神田錦町二丁目三番地
發行所　東京神田錦町二丁目二番　電話本局二八五二番　新聲社

不許複製

新聲は文學美術両界に亘れる大雜誌也

材料の豊富と、趣味の饒多と、躰裁の優美なるとに於いて、今の文學雜誌界を獨歩し、發行部數第一を以て數へらるゝに至る

毎月一回十五日
定價一部拾貳錢
郵税同一部壹錢
六ヶ月前金郵税
共金七拾貳錢〇
一年壹圓卅二錢

斷霞錄

河東碧梧桐君序
大橋豹軒君序
寒川鼠骨君著

價廿五錢 郵税四錢

子規子の一派已に俳句に成功して今や文章に寫實の一旗幟を樹つ。而して鼠骨君は其雄を以て稱せらるゝの士、文、小說と美文との特長を拔き、之に俳文の趣味を加味して、奇警晒脫、觸目萬端、いかゝるものを描くも適せざるなし、蓋し新文壇の珍品として看る可きもの、修文の士は必ず座右一卷を備へて、其文品を玩味せざる可からず。

能文要訣

德富蘇峰先生序

蘇峰先生本書に序して曰く、行文醇雅、所論平直、世の所謂糊口射利の作者と撰を異にす、其能く後生を益するに足る亦少しとせず、豈其れ道に志し、學に志せる所以に因る乎、將た數奇不遇中懷鬱積發して能く此著をなす乎、云々

定價拾八錢郵税二錢

阪井松梁君著述

博士 森鷗外先生序文
畫家 大下藤次郎君著述

◎水彩畫の栞

（質問自由）本言について難解の点あらば、質問せよ明快なる答辨を與ふ。

全一冊 定價貳拾錢
頗美本 郵税金四錢

田山花袋君著（新刊）

野の花

我に初戀の佳人あり、半生の苦樂共にせんと心に誓ひゐるしに、斗らざりき我を懷うて日夜懊惱、身神衰へ行く少女あらんとは。其人賢にして美、殊に振分髮の幼馴染なるに至りては情緒いかで亂れざるを得可き。嗚呼都べての障礙を排して、清き初戀を保つは是乎。我爲めに不遇の戀に泣く人の情を受くるは是乎。這般戀の惱みを描けるもの、『野の花』の一卷とす。行文綿麗描寫精細、うら若き青春の子女が、はかなき戀に惱むの趣、縱横に揮灑して憾みなし。

定價廿四錢 郵税廿四錢

正岡藝陽君著（三版）

婦人の側面

戀人○女學生○僞善の使途
處女○醜業婦○妻、母、姑
結婚○理想の妻○女子の境遇
家庭○男女同權○市井の女子
美貌○牝鷄司晨○田園の女子

掲載要目

女子はいかゝるものぞ？ 著者は此千古未了の問題を解釋せり。觀察極めて奇警、論議最も大膽忌む所なく憚る所なく、其美點を擧げ、惡質を貶し、趣味湧くが如き文字の間に、女子の光明と闇黑との両方面を說明して、眞相を明かならしむ。

定價貳拾錢 郵税金四錢

正岡藝陽君著

時代思想の權化

（定價貳拾五錢＊郵稅四錢）

星亭と社會

全一冊

明治の時代思想を知らんとせば、必ずや其權化たる星亭を看ざる可からず。本書菊版百五十頁を費して、星亭のあらゆる方面を論評す。精細の論議　縱横の觀察、一代の梟傑の面目を發揮し盡くして、寸毫掩ふ能はざらしむ。文勢奔放、字に風霜を挿みて、堂々虹霓の氣を吐き來る所、痛快無比、一讀二讀三讀、卷を措くに忍びざらしむ。

正岡藝陽君著

新聞社の裏面

定價郵稅共貳拾錢

社會の秘密を摘發する新聞社には、いかゝる秘密か籠れる。白堅の大館其門戸を固うして容易に人の窺ふを許さず唯茲に秘密の鑰を握れる者藝陽子あり縱横の筆、最も詳密に、最も痛切に、其秘密を發き、私行を暴露して、彼等の醜狀、目睹するが如からしむ。

一條成美　平福百穗
山中古洞　鏑木清方　畫

青年文藝

彩雲

定價甘錢　郵稅四錢

『彩雲』は青年文士の佳作數十篇を掲げて、嬌媚多恋、月下落紅の趣あり、萬樹情瓊の態あり、趣、篇と共に異なりと雖も、皆青年文壇の爲めに、萬丈の氣を吐くに足るもの。

緒方流水君著

塵影錄

全一冊　定價參拾錢
美本　郵稅金四錢

掲載要目

社會評論
滿都の人皆孤也　下等社會の教育　學生の生活　康有爲の心事
英傑の後生願ひ　國民道德の程度　星亨と該撒　從合趨向の墮落
古人の悟を讀む　法科大學の試驗　非功名心論　歷史の詩趣

文藝評論
寫實の所謂精緻粗敍　風俗壞亂！發賣禁止　演藝の改良　二種の沈默
强て問題を作るの弊　大に文壇を賑はす法　右補足說　出たらめ
文士保護に關する卑議　教師としての小說家　所謂宗教家　一豚蹄酒一壺

文士月旦
尾崎紅葉　眉山何ぞ振はざる　ふる郷　嵯峨の舍の近作
幸田露伴　露伴の近狀に就て　腐肉團　松村氏の修養錄
風葉の一面　鏡花と眉山を論ず　一葉全集を讀む

雜錄
雪花菜　零言二三　歷史的觀念　放言喝破錄
眼雷耳雷　雅号の事　行く水の記　勵言挑發錄
漫語漫錄　男の躰面　友の曰く錄　雪の朝漫錄　余の時處度哲學　右哲學の補遺
漫言……其他

新聲臨時增刊

卯花衣

定價拾五錢　郵稅金壹錢

舶來上等洋紙印刷　四六二倍大判百頁

文藝と道德（島村抱月）福池櫻痴論（正岡藝陽）。大原の春色（菊地幽芳）道すがら（中村春雨）を始め、文想秀拔の作數十篇、繪畫は泰西絕代の名畫十餘面、一條成美子の苦心慘憺の作、五月雨、行く春等を掲ぐ。

大町桂月君序　一條成美君畫
小林柳村君著　山中古洞君畫

戀愛と文學　參版

（三版）

定價四錢　郵税共廿錢

戀愛!!!何等美くしく清らなる詩題そ、其名を聞くだに、滿身の血の沸き來るを覺ゆるに、今著者が艶麗比ひなき筆を以て之を描くあり。文字艶にして浮あらず、綺にして紊ぜず、初戀の樂しきを歌ふ所菫さく春の野に若き男女の逍遙ふを見る如く、失戀の悲しみを述ぶるや、秋風孤閨に泣く少女の思ひにも似たり。心にもなやみある者を慰む、いかで此書に及ぶものあるべしや。

新聲記者　田口掬汀君著

小說　片男浪

定價郵税共金貳拾五錢

新聲社同人著（再版出來す）

三十棒

定價郵税廿四錢

『大坂毎日』批評　三十棒は新聲社中の人々の手になれるその抱負、主張、論議等を蒐集し一冊子とせるもの、勇往の文縱横の筆、氣焰天に揚るの意氣あり、その抱負ありて、以て文壇に馳騁するに足る亦一讀すべき好冊子也。

墳墓

定價郵税廿四錢

本書は人生の安息所とも云ふ可き墳墓を描きたるもの、文字流麗にして、趣味饒多、卷中の佳所に至れは、金聲にして玉振、まさに朗々高く歌ふに足る。絶好の詩題たる墳墓を歌ふ、實に斯くの如からざる可からず。

落合直文　大町桂月
與謝野寛　三君序文

片われ月

金子薫園君著

著者徒爾に歌はず、歌へば乃ち吟腔鳴り韻致亮喇として盡きず○本書は實に君の作中の粹を集めたる者、一度び公にするや、天下の新聞雜誌爭うて賞贊の聲を列ね、讀書家亦趨走して之を求め、初版忽ち、盡きて、再版發售するに至る、以て江湖の歡迎の大なるを見て、內容の如何を知るべし、

○定價廿五錢郵税四錢

中村不折　結城素明
一條成美　三君挿畫

談話　露伴　柳浪　眉山　魯庵
水蔭　宙外　鏡花　風葉
抱月　天隨　鳴雪　直文

創作苦心談

再版出來

本書は上掲十二家の談話を輯錄したるものにして、創作苦心談あり、作者の經歷談あり、文壇に對する氣焰あり、興味の多きは論なしと雖も一面に於いて小說美文和歌俳句の作法を作者の經驗に照らしてなるものなれば、創作上の參考書としてなるべし他に比するものなかるべし

○定價貳拾錢郵税四錢

肖像　不知庵　柳浪　鏡花
萩の舍　鳴雪　風葉
水蔭及其庭園

評論書類

文學士　大町桂月君著

文學小觀（參版）

四六版　洋裝美本　定價參拾錢　郵稅金四錢

文學士　久保天隨君著

山水美論（再版）

卷端風景寫眞畫四葉を添ふ

表紙不折　君畫　定價廿五錢　郵稅金四錢

文學士　久保天隨君著

柳宗元

東西文豪評傳　表紙不折　君畫　定價廿五錢　郵稅金四錢

無名氏著述

自然美觀（新刊）

表紙古洞　君畫　定價拾八錢　郵稅金二錢